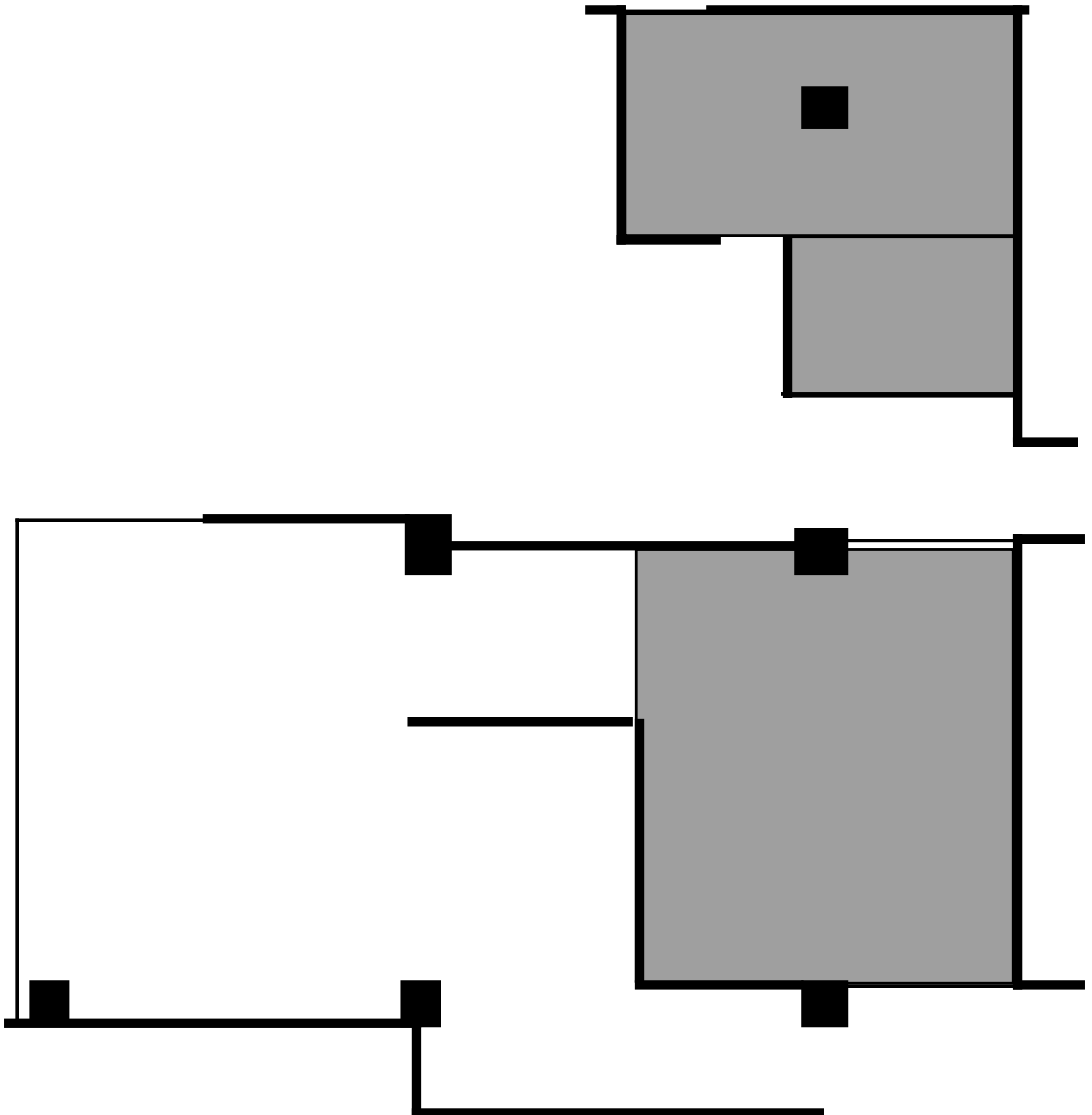
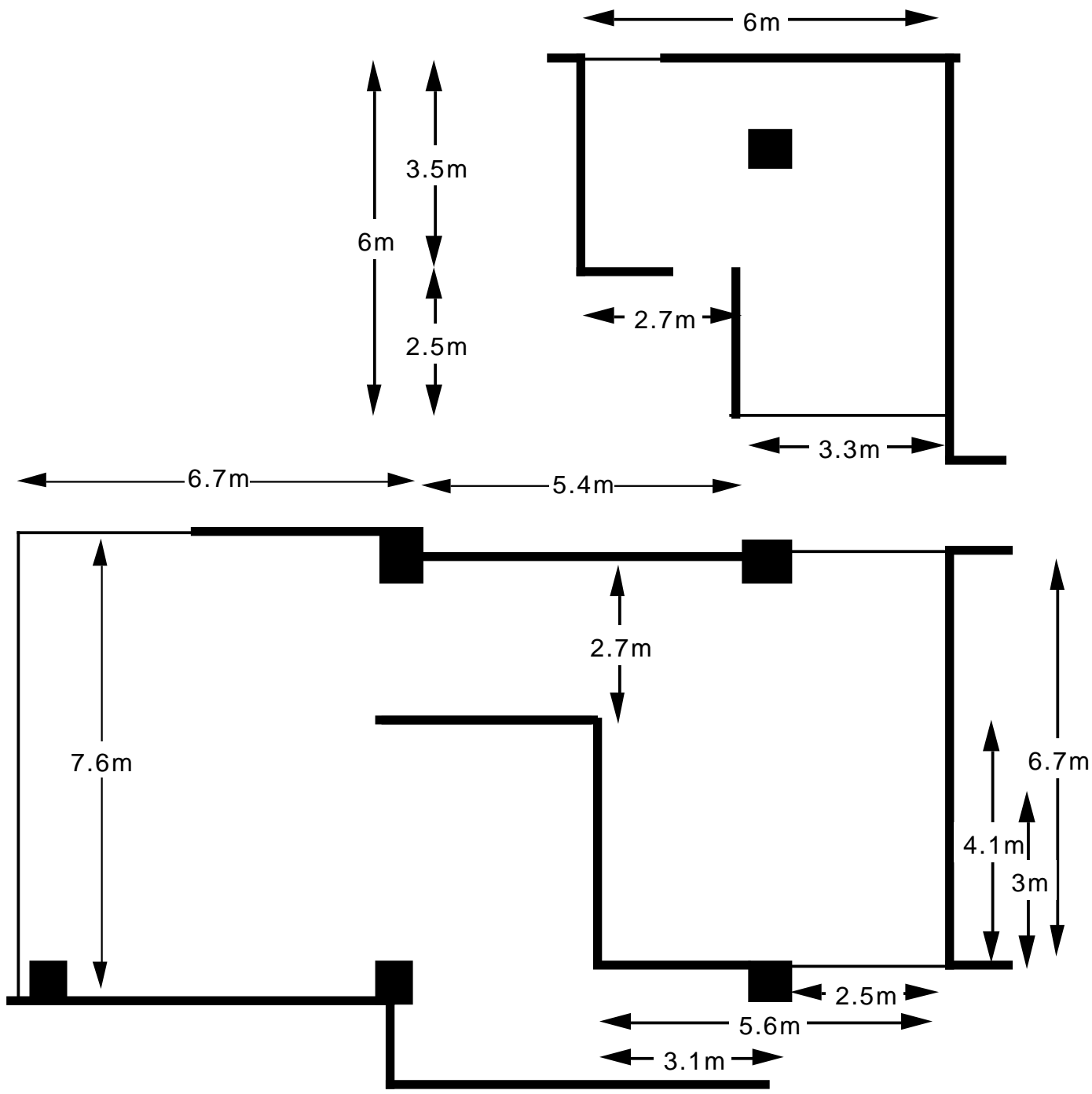


ハマダ眼科 9 3 年改装部分

5年前、母の診療所の一部（24坪）を改装して、手術室、診療室、待ち合い室、手術準備室を作ることになりました。狭すぎて、機能しないのではないかと当初の予測に反し、すばらしい仕上がりとなり、5年後の今でも実に機能的に動いております。5年を経過し、そろそろ施設の見直しの時期になっており、5年前の改装過程を見直してみました。下に改装部分24坪を示します。

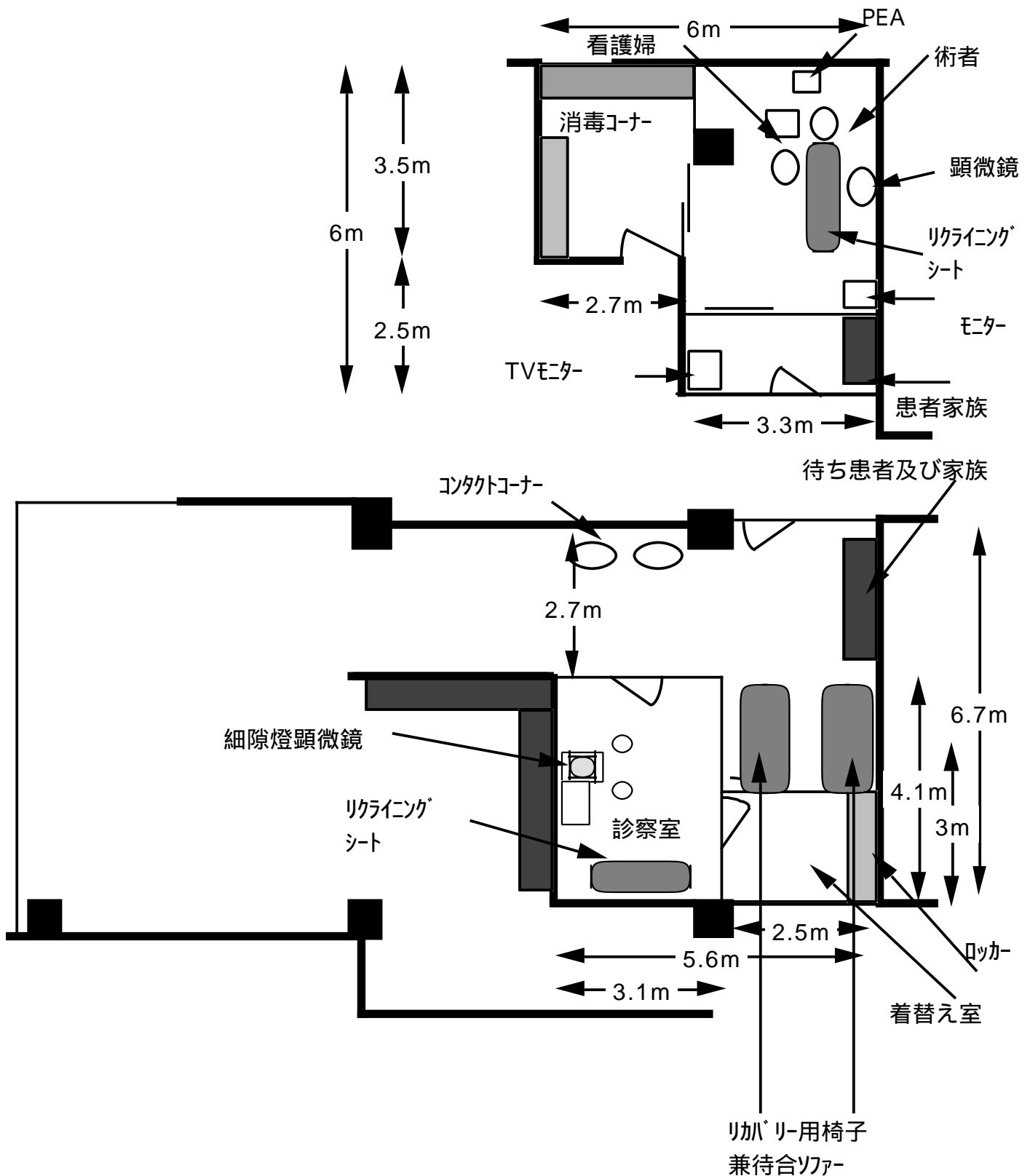




ハマダ眼科改装予定（1993年5月以前）

1993年5月にカナダのGimbel eye centerに見学に行く前のもので、更衣室を設定しているため診療室の前のスペースが狭くなっています。

手術室に水平層流空気清浄機の設定もされていません。



1993年のGimbel Eye Center見学で学んだこと

1. 患者さんの更衣は考えないこと

手術室にマスクをして入室する患者さんをあまり見かけません。このことは、通常手術室の空気清浄度を確保することを考えるのではなく、術野がきれいであればそれでいいという考え方をしているということです。患者さんが咳をすれば、それだけで一立方フィートあたり数千の空中浮遊粉塵を作ることになります。しかも咳の場合、空中浮遊粉塵に細菌が含まれる可能性が高いと思われます。それにも関わらず、手術室にマスクをせずに患者さんを入室させるわけですから、手術室全体の空気清浄度を上げることはあまり意識していないということです。手術中の術野の空気清浄度が高ければいいと考えているということです。逆に言うと、手術中の術野の空気清浄度を上げる方法があれば、普段着のまま手術室に入ってもいいということになります。

Gimbel Eye Centerでは患者さんは更衣せずにオーバーガウンを羽織るだけで手術室に入室していました。その代わりに、手術台の頭部あたりに見慣れぬ装置が置かれていました。これが水平層流空気清浄機でした。手術時に術野の空気清浄度を上げるための装置です。当院で用いている水平層流空気清浄機の前では1立方フィートあたり数百程度の空中浮遊粉塵を認めるにすぎません。病院の一般外科手術室の空気清浄度が1立方フィートあたり1万程度ですから、術野局所に関する空気清浄度に関しては、水平層流空気清浄機を用いることによりかなりのレベルまで上げることができるということになります。

結論としては、水平層流空気清浄機を導入すれば、患者さんの手術のための更衣は必要ないということです。

2. 手術室全体の空気清浄度を上げるのではなく術野の空気清浄度を上げること
3. 患者さんの家族への手術中の説明は十分教育された専属の説明員を置くこと
4. 患者さん、患者さんの家族は手術中会話できる距離に置くこと
5. 手術室は全面がガラスで患者さんの家族に開放されていること

1993年5月の連休明けにGimbel Eye Centerを見学させていただき、7月に当院の改装に取りかかったのですが、患者さんの更衣室をもうけなかったことによりスペース的な余裕ができ、バランスのとれた診療所となりました。水平層流空気清浄機の導入は、部屋全体のHEPA filterによる空気清浄機との併用により期待を遙かに上回る空気清浄度を得ています。空気清浄機を30分回せば手術室の隅でも1立方フィートあたり数百レベルの空气中浮遊粉塵しか認められなくなります。これは手術室が必要十分に小さいことによる効果でもあります。患者さん、患者さんの家族に白内障手術を説明のための要員を育成しました。患者さんの家族は、手術中でもガラス越しに患者さんと会話ができる距離に居ることができます。当院の手術室は全面ガラス張りで、すべてを観察することができます。